

令和6年度 第3回松本市公民館運営審議会結果

日 時 令和7年3月13日(木)

18:00～20:00

会 場 松本中央公民館3-2

1 開 会

2 委員長あいさつ

2月に開催した「未来へつなぐ私たちのまちづくりの集い」では、様々な課題へ多面的に考える機会となり、協力いただいた方々には感謝している。午後に分科会に参加して、多様な人たちが同じ課題に対して議論している姿に「公民館らしさ」を感じた。

午前の基調講演では、四賀社協・コミュニティスクール・町会といった異なる分野の方がパネリストとして登壇し、事例から共通するまちづくりのポイントを探ることができた。また、町会の苦労話を聞く中で、自治が揺らいでいる現状において、改めて住民自治組織のあり方・大切さを確認する場にもなった。

3 内 容

(1) 令和6年度松本市議会2月定例会 公民館に関連する一般質問について

3月4日(火)、太田正徳議員から公民館に関する質問があり、赤羽教育次長から回答したため、内容について共有

(2) 令和6年度生涯学習課・中央公民館事務事業の総括について

公民館事業に関する「コミュニティスクール事業(CS)」「学習スペース・フリースペース」「ICTを活用した取組み」に関する箇所を中心に、事務局から説明

委員からの意見

- ①第三地区のフリースペースは利用が多いものの、地域住民とのつながりは弱く、子ども食堂への関わりも弱い。現在あがたの森の児童センターでは、200人を越える利用登録があり、受入れが厳しい状況。小学校3年生までは利用しているが、5、6年生は自宅にいる状態。

対応策として5、6年生を対象に、寺子屋事業を始めたいと育成会や地域づくり協議会で議論しているが会場が無い。子どもたちの「遊びたい」という気持ちを考えると、公民館の大会議室的な場所を想定するが、第三地区公民館は利用状況的に厳しく、近くの勤労者福祉センターや柔剣道場などの施設が使用できると良い。市の施設が連携しながら、対応できるようになっていければと感じている。

また、第三地区は清水・源池小学校へ通う児童がおり、学区の関係で源池の子ども

は公民館へ来られない。逆に、清水の子どもはあがたの森へ行けないという課題もあるため、公民館へは清水・源池に関係なく来られるようにしてほしい。

- ② 7館でのフリースペース開設状況は分かったが、他自治体では春・夏休みなどの長期休業を活用し、小中高大学生が利用している。住民と一緒に食事を作ったり、工作をしたり、遊んだりといった交流を図っている。
- ③ 今後の部活動地域移行の関係で、比較的スポーツ系の受け皿はあるものの、美術部の受け皿がない。美術部へ入る生徒は、感情や思いを表面に出しにくい&自分で居場所を見つけにくい傾向が強く、部活動が無くなってしまうと家に引きこもることが懸念される。今後、更なる公民館と学校の連携が求められる。
- ④ 部活動の地域移行は、CSで取り組んでいくことも大切。文化系は、公民館が間に入って住民などに関わってもらうことも大事で、企業でも関心を持っているところがある。生徒の減少により、学校から部活が無くなれば、他校と連携することも必要になってくる。また、本市のシニア・プラチナ大学の受講生は様々な技術があり、そういった人との連携も考えられる。今後、多様な連携が必要となることが予想される。
- ⑤ 子どもを取り巻く環境が、大きく変化する時期に来ている。公民館は、子どもが地域とつながる大切な接点で、地域のなかで育てられ・関わってもらったことは、その後の人生にも活かされる。公民館だからできる、発信・連携という点を意識し、豊かな子どもたちの育ちへつなげてほしい。

(3) 意見交換

「5つの重点戦略『テーマ 地域拠点・自治組織の再構築』における各地区の取り組み結果について」

今年度の各公民館取り組み結果の概要について事務局から説明した後、島内公民館の館長・主事から、島内地区運動会の見直し事例について紹介

取り組み事例の概要

- ① 住民が世代を越えて交流すること、健康増進、住民連帯を育むことを目的に、公民館長が大会長となり、体協が運営、町会・町内公民館が参加者集めを担い、60年以上に渡って地区運動会を実施
- ② 令和元年に、準備中ゲリラ豪雨に見舞われて中止。令和2、3年はコロナで中止したが、令和4年度に、福祉ひろば推進協議会で「今度も運動会を実施するのか。実施する場合は、これまで通り行うか変えるのか検討が必要」との意見が出される。
- ③ 町会長・町内公民館長などの役員を中心に、町会ベースでの議論を進めたところ、次のとおり課題が出される。
 - ・現状、全ての町会が出場できていない。
 - ・選手集めが年々厳しくなっている。
 - ・種目の年齢制限と、町会対抗が高いハードルになっている。
 - ・多くの町会が参加は難しいと考えている。
- ④ そこで、R4年度は運動会を中止し、町会・町内公民館・体協の副会長以下の若手

等で今後の方向性を検討するプロジェクトチームを組織

- ⑤R 5 年度一年かけて議論し(全 6 回)、各団体や地域に情報共有を図り、「スポーツフェスティバル in 島内」としてリニューアルする方向性について合意形成
6 回行われた話し合いは、「先が見えない&答えがわからない」なかで、多様な立場から様々な意見が出されて、まとめるのに本当に苦労した。
- ⑥R 6 年度は、役員会等で種目や実施日等を検討すると共に、運営役員による「競技体験会」を実施し、より住民が参加しやすく楽しめる 6 種目を決定(R6 の検討スタート時点では 15 種目が候補)。
- ⑦秋以降に、地区内への周知や運営者等の会議を開き、各種目の係長を中心に検討
当日は、従来の動員型の町会対抗から個人参加に変えて 3 0 0 人が参加
アンケート結果からも「次年度廃止」という意見は 1 件もなかった。
- ⑧3 年にわたる一連の取組みを振り返り、持続可能なフェスティバルに変えていく過程で、次の 3 点が見えてきた。
- ・意見を地道に拾い上げながら、ボトムアップ型で進めることの重要性
 - ・R 5 年度にプロジェクト会議で、多くの議論を行うことの重要性
 - ・強みとして、役員が「自分たちで創り上げる」気概がある一方で、弱みとして町会選出の地区評議員(体育事業を進めるために、各常会単位で選出される役員)が輪番制という点もあって主体性が弱く、当日の運営へも不参加が多数いた。

委員からの意見

- ①子どもの頃に地元の運動会に参加したことは、地区のことも知れたし、本気の大人も見られてとても楽しかった思い出がある。島内は、そういった大切なイベントが無くならなかったことが、子どもたちにとって価値あることだと思う。
- ②次年度以降、子どもたちの意見を聞いたり企画等の運営へ参画したりしてもらおうと、さらに子どもたちにとってより良きイベントにブラッシュアップされる。
- ③庄内地区では、今年度から並柳小学校に加えて筑摩小学校の子どもたちも、ドリーム庄内のイベント企画に関わるようにした。子どもたちが考えた競技や前夜祭も復活し、並柳・筑摩小の児童間の交流や住民との交流が図られた。
- ④現在新村地区では、運動会に変えて防災フェスティバルを行っている。炊き出しや給水・はしご車体験、段ボールベッド体験など幅広く実施しているが、個人的にはスポーツ要素が完全に消えてしまったことに残念さを感じている。
- ⑤地元で子ども食堂を行っており、役職で協力をお願いしたところ、中にはイヤイヤ参加している人もいた。役員等を担うことは大変だが、今後、地区評議員の課題をどのように考えているか。

【返答】島内体協は、競技種目(野球・卓球・ソフトバレー等)と各町会・常会から選出される地区評議員で構成。町会から独自に活動費を集めるなど、高いプライドと活動意識を持っている。ただ、地区評議員については、輪番制や常会の事情等で「やらされ感」を持ってしまっている面もある。今後体協として、スポーツ大会の実施方法の見直しなどを進める方針だと聞いている。また、スポーツフェスティバルへの関わりについては、そういった体協の見直しを通じて「変化」することを期待すると共

に、次年度も不参加が多い可能性があれば、運営方法の見直しで対応したい。

- ⑥種目を15種目から実施した6種目に絞った理由は「町会対抗」の課題をクリアし、個人でも参加できるようにするために、年齢・身体的な要因で序列がつきにくい競技を選考したと推測されるが、実際はいかがか。

また、個人が単位になりすぎると、「住民のつながり」という面で弱さを感じるが、その点はどう考えているか。

【返答】委員ご指摘のと通りの理由で、6種目を選考した。これは、「競技体験会」を実施したことが大きく、「いかにして、差がつきにくい&単純な競技とするか」という視点で選ぶことができた。また、「住民のつながり」という点では、「玉入れ」がみんなで楽しむ競技で、当日も盛り上がっていた。アンケートでは、「次年度は大玉送りを取入れてはどうか」という意見もあり、個人で参加する気軽さを担保しつつも、みんなでつながれる場も構築できるように検討していきたい。

- ⑦運動会のようなイベントは、前例踏襲で進めていくと、こなすことが目的化されてしまう。そうなれば、「ただ問題なく終われば良い」という感覚となり、楽しさを感じられず、つながりが連鎖して新たな取組みへつながるような化学変化は起こらなくなる。活動のなかで自分自身を発見し、自分たちだからできる新しいチャレンジへつなげることで、面白さや楽しさが生まれ、自分自身のものにしていくという視点が見える。

人口減少の中では「なぜ実施するのか」という視点で捉え直し、一人ひとりの思いを重ねていくなかで「私たちだからできること」という感覚を持つことが大切で、島内地区の事例はいろんな人の声や思いを取り込んだ、そういった活動だと言える。

4 閉 会